

立教学院チャペルコンサート

Chapel Concert

「聖歌によるオルガン作品」

2026年1月10日（土） 開場 13:00 開演 13:30

立教学院諸聖徒礼拝堂

オルガン キム・ジソン

Fantasia und Doppelfuge für Orgel Op. 28

(Ein Feste Burg ist Unser Gott)

「神はわがやぐら」幻想曲と二重フーガ

Hans Fährmann (1860–1940)

ハンス・フェールマン

Variations on “Amazing Grace”

「アメージング・グレース」による変奏曲

Arthur Wills (1926–2020)

アーサー・ウィルズ

Shall We Gather at the River – Fantasia

幻想曲「まもなく彼方の川で」

William Bolcom (b. 1938)

ウィリアム・ボルコム

Lonely the Boat

孤独な舟《バルボア・パーク・オルガン組曲》より

Michael Burkhardt (b. 1957)

マイケル・バークハート

Variations on Two Themes

二つの主題による変奏曲

Naji Hakim (b. 1955)

ナジ・ハキム

Sonata No.5 in A Major, Op. 159 “Quasi una Fantasia”

ソナタ 第5番 イ長調 ～幻想曲風に

Charles Villiers Stanford (1852–1924)

チャールズ・ヴィリアーズ・スタンフォード

I. Allegro moderato

アレグロ・モデラート

II. Allegretto non troppo mosso

アレグレット・ノン・トロッポ・モッソ

III. Allegro

アレグロ

主催：立教学院

※会場内での飲食・撮影・録音はご遠慮ください。

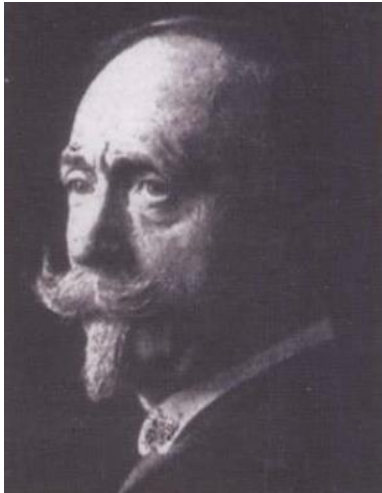
「聖歌によるオルガン作品」

プログラム・ノート

金 智聲

「神はわがやぐら」幻想曲と二重フーガ

ハンス・フェールマン(1860-1940)



ハンス・フェールマンは、ドイツ後期ロマン派の伝統に根ざしたオルガニスト・作曲家であり、特にルター派のコーラルに基づくオルガン作品において卓越した対位法と形式を示した人物である。ドイツ教会音楽の伝統を継承しつつ、コーラル幻想曲やフーガ形式に深い関心を寄せ、神学的意味と音楽構造を緊密に結びつける作曲家として評価されている。彼の音楽は和声的にはロマン派の語法を用いながらも、形式面ではバロック的な厳格さを保持している点に特徴がある。

“Fantasie und Doppelfuge für Orgel Op.28”は、マルティン・ルター自らが作曲した代表的な宗教改革のコーラル“Ein feste Burg ist unser Gott”を主題とした大規模なオルガン曲である。本作は幻想曲(Fantasie)と二重フーガ(Doppelfuge)の二部で構成され、コーラルの旋律が持つ神学的・象徴的意味を音楽的に最大限に引き出している。幻想曲部分では、コーラル旋律が荘重かつ劇的な和声の中で自由に変容され、「堅固な信仰」という城塞のイメージが力強く描かれている。続く二重フーガでは、二つの主題が緻密な対位法によって結合され、秩序と緊張、そして最終的な勝利への確信が音楽的に表現される。特にフーガにおける段階的な音響の拡大は宗教改革信仰の広がりと不動性を象徴的に示している。本作は、ドイツ・ルター派オルガン音楽の伝統の精髓を示す作品であり、華麗な技巧よりも構造的完成度と信仰告白的性格が際立っており、宗教改革を主題とするオルガン・レパートリーの中でも、その規模と精神的深度の点で重要な位置を占めている。

「Amazing Grace」による変奏曲

アーサー・ウィルズ (1926-2020)



Amazing Grace
AMAZING GRACE

American melody
From Carrell & Clayton's *Virginia Harmony*, 1831
Arr. by Norman Johnson, 1928-

JOHN NEWTON, 1725-1807

1. A - maz - ing grace - how sweet the sound - That saved a wretch like me!
2. 'Twas grace that taught my heart to fear, And grace my fears re - lieved;
3. Thru man - y dan - gers, toils and snares I have al - read - y come;
4. When we've been there ten thou - sand years, Bright shin - ing as the sun,
I once was lost but now am found, Was blind but now I see.
How pre - cious did that grace ap - pear The hour I first be - lieved!
'Tis grace hath brought me safe thus far, And grace will lead me home.
We've no less days to sing God's praise Than when we'd first be - gun.

アーサー・ウィルズは、英国を代表するオルガニスト・作曲家であり、長年にわたりイーリー大聖堂のオルガニストとして活躍し、英国国教会の伝統における教会音楽およびオルガン音楽の発展に大きく貢献した音楽家である。演奏家としてのみならず教育者としても影響力が大きく、即興演奏と伝統的な形式感覚に基づく作曲において、均衡の取れた音楽世界を示している。彼の作品は、明確な構造、節度ある現代的語法、そして典礼的感受性が調和している点に特徴がある。

本作は、世界で最も広く愛されている賛美歌の一つである“Amazing Grace”の旋律に基づくオルガン変奏曲であり、ウィルズはこの作品において、素朴で簡潔な賛美歌旋律を多様な音色、リズム、和声的变化によって段階的に拡張し、賛美歌が持つ霊的な深みをオルガン音楽として説得力豊かに表現している。各変奏は旋律の本質を損なうことなく異なる性格をもって展開され、瞑想的で内省的な雰囲気から、壮麗で明るいクライマックスへと向かう。とりわけオルガンの多彩な音色対比と自然な流れは、賛美歌の告白的性格と「恵み」のメッセージを強調している。本作は華麗な技巧よりも節度ある表現と構造的完成度を重んじ礼拝的性格と演奏会用作品としての音楽的深みを併せ持つ作品として評価されており、英国国教会オルガン音楽の伝統の中でも賛美歌を芸術的に再解釈した代表的な例として、信仰告白と音楽的省察が調和した作品である。

幻想曲「まもなく彼方の川で」

ウィリアム・ボルコム (b. 1938-)



Rev. B. LOWRY. **Beautiful River.** 220

1. Shall we gath - er at the riv - er Where bright an - gel feet have trod; With its crys - tal tide for -
2. On the mar - gin of the riv - er, Wash - ing up its sil - ver spray, We will walk and worship

CHORUS.

er - - er Flow - ing by the throne of God? Yes, we'll gath - er at the riv - er, The
ev - - er, All the hap - py, gold - en day. Yes, we'll gath - er at the riv - er, etc.

beau - ti - ful, the beau - ti - ful riv - er - Gather with the saints at the riv - er That flows by the throne of God.

ウィリアム・ボルコムは、アメリカを代表する作曲家で、クラシック音楽、ジャズ、ラグタイム、ミュージカル、大衆音楽を自在に行き来しながら、独自の音楽世界を築き上げた。彼は学術的な現代音楽とアメリカ大衆音楽の伝統との境界を打ち破り、「アメリカ的な音楽言語」を本格的な芸術音楽の領域へと引き上げた作曲家として高く評価されている。とりわけ声楽曲、管弦楽曲、ピアノ作品に加え、教会音楽や賛美歌旋律に基づく作品においても、深い音楽性と人間的な温かさを示している。

“Shall We Gather at the River”はアメリカの福音讃美歌の中でも最も広く知られている賛美歌の一つで、その旋律に基づくオルガン幻想曲であり、連作“Gospel Preludes”のうちの一曲である。ボルコムは、親しみ深い賛美歌旋律を単に装飾するにとどまらず、自由な形式の中で旋律を変形・拡張し、即興的で叙情的な音楽の流れを生み出している。幻想曲という形式にふさわしく、厳格な構造よりも自由な展開を重んじ、静かで瞑想的な雰囲気の中に始まり、次第に深い情感と響きを積み重ねていく。ジャズの和声、ブルース的な色彩、そしてアメリカ福音派の音楽特有の、人間的情緒が節度を持って溶け込み、賛美歌が持つ「まもなく彼方の川で集わん」という終末論的な希望と慰めのメッセージを、現代的な感覚で再解釈している。華麗な技巧よりも音色や雰囲気、叙情的表現に重点を置き、礼拝前奏としてのみならず演奏会用のレパートリーとしても適した作品と評価されている。“Gospel Preludes”全曲と同様に、この作品はアメリカ教会音楽の伝統と現代音楽語法が自然に融合した代表的な例であり、賛美歌を通して信仰と人生の情緒を深く伝える作品である。

「孤独な舟」《バルボア・パーク・オルガン組曲》より マイケル・バークハート (b. 1957-)



マイケル・バークハートは、アメリカのオルガニスト、作曲家、教育者であり、とりわけ教会音楽および礼拝音楽の分野において幅広い影響を与えてきた人物である。彼はアメリカ・ルター派の伝統を基盤に活動し、賛美歌の旋律や典礼的要素を現代的な感覚で再解釈する点において卓越した能力を示している。その作品は、演奏者と会衆の双方を考慮した実用性と音楽的深みを兼ね備え、明確な構造の中に叙情性と霊的省察を織り込んでいる点に特徴がある。

SANCTIFYING AND PERFECTING GRACE
476 Lonely the Boat

1. Lone-ly the boat, sail-ing at sea, tossed on a
2. Strong winds a - rose in all their rage, toss-ing the
3. Trem-bling with fear, deep in de-spair, look-ing for
4. "Plead-ing for your mer-cy, O Lord, e-ven a
5. "Storms in our lives, cru-el and cold, sure-ly will

cold, storm-y night; cru-el the sea which seemed so wide,
it - my lone boat; waves bill-owing high, toss-ing the boat,
help all a - round, the sail-or saw light from a-bove.
sin-ner like me; com-mand, O Lord, calm to the sea,
a - rise a - gain, threat-en-ing lives, threat-en-ing us

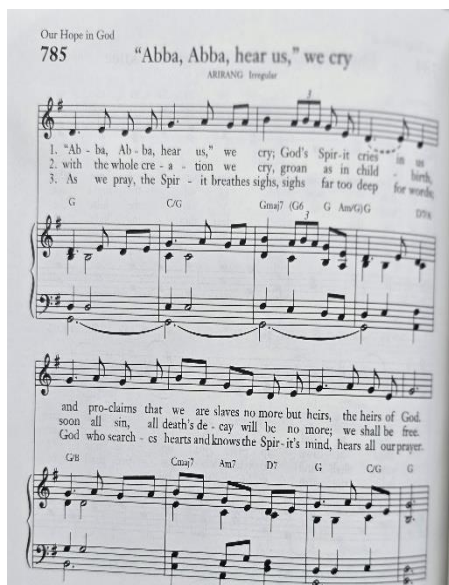
with waves so high. This sin-gle ship
lost and a - float. The sail-or stood
"Help can be found; my God is here
as in Gal-i-lee! Please save my life
on life's wild sea. Power-ful and great,

sailed the deep sea, straight in - to the gale; O Lord,
all a-lone, won-der-ing what to do; O Lord,
in my small boat, stand-ing by my side; O I
from all dan-ger, grant a peace-ful life; O please
God's hand is there, firm-ly in con-trol. O Lord,

great is the per-il, dan-gers to all as - sail.
so help-less was he, won-der-ing what to do.
trust in the Sav-ior, now in my life a - bide.
be mer-ci-ful, Lord, in times of calm and strife.
calm peace comes from you, peace comes to my lone soul."

「孤独な舟」は、連作“The Balboa Park Organ Suite”の第Ⅰ楽章であり、静謐で瞑想的な性格をもつオルガン作品である。題名が示すように、本作は広い海の上にただ一艘浮かぶ小舟の情景を想起させ人間の孤独、内面的な沈黙、そして霊的省察を音楽的に描き出している。Andante Tranquillo の指示どおり、落ち着きと節度をもった流れの中で展開され、簡潔な旋律、透明な和声、柔らかな音色の用い方が際立っている。華麗な技巧や劇的な対比よりも、穏やかな波のように反復・変奏される音楽的身振りを通して深い内的共鳴を生み出している点が印象的である。

この曲では、韓国を代表する民謡「アリラン」の旋律と、讃美歌345番「真っ暗な夜、荒れ狂う風が吹くとき」（作詞：Kim Hwal-ran、作曲：Lee Dong-hoon）の旋律が用いられ、美しく織り合わされている。これらの素材は、曲の瞑想的性格と霊的象徴性をいっそう深めている。このような表現は、演奏者に繊細なフレージングと呼吸、そして音色選択における細心の配慮を要求する。



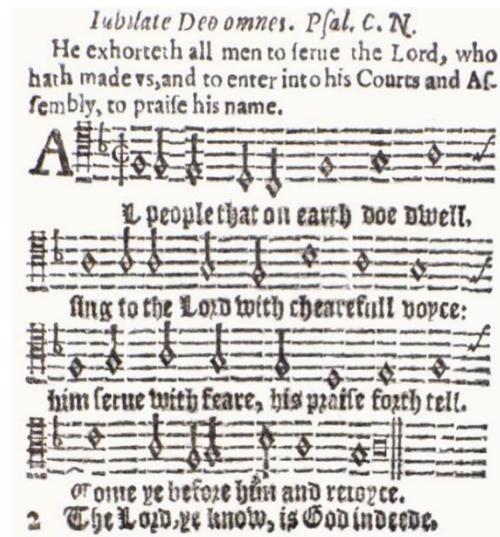
本作は、礼拝における黙想や内省の場面にふさわしいだけでなく、演奏会においても聴衆に静かな集中と省察の時間をもたらす作品として評価されている。バークハート特有の典礼的感受性と人間的叙情性がよく表れた作品であり、現代アメリカのオルガン音楽が有する霊的深みと節制された美を示す代表的な一例と言える。

賛美歌の歌詞は次のとおりである。

- 1 暗い夜 荒々しい風が吹くとき 万頃蒼波 果てしない海に
孤独な一艘の舟が漂いゆく ああ なんと危ういことか
- 2 嵐が恐ろしく吹き荒れ 怒れる大波が起こるとき
舟人はなすすべもなく ああ なんと哀れなことか
- 3 絶望の中で 舟人は震えながらも 一筋の明るい光を見いだし
舟の中にも神が共におられると信じ 祈りをささげる
- 4 父なる神よ この罪人を顧み 荒れ狂う嵐を静め
この哀れな人生を救いたまえ ああ われらの神よ

二つの主題による変奏曲

ナジ・ハキム (b. 1955-)



ナジ・ハキムはレバノン出身の作曲家・オルガニストであり、現代オルガン音楽界を代表する最も重要な人物のひとりである。彼はオリヴィエ・メシアンの後継者として、パリのサント・トリニテ教会のオルガニストを務め、フランス・オルガン音楽の系譜を受け継ぐと同時に、独創的な現代的語法を確立した。ハキムの音楽は、フランス・オルガン音楽特有の華麗な音色感覚と精緻な対位法に加え、中東音楽に由来するリズムや旋法的要素が融合している点に大きな特徴がある。彼は演奏家、即興演奏家、作曲家としていずれも卓越した能力を備え、伝統と現代、信仰と芸術を自然に包摂する音楽世界を築き上げている。

この曲は、二つの異なる賛美歌旋律“Old 100th”と“Donne Secours”を基にした変奏曲であり、ハキム特有の知的でエネルギーに満ちた作曲技法が鮮明に示された作品である。二つの主題はそれぞれ固有の性格と雰囲気を持ち、作品全体を通して、多様なリズム、和声、テクスチュアの変容によって絶えず再解釈されていく。伝統的な変奏形式を踏まえつつ、不規則なリズム、強い推進力、対照的な音色配置によって現代的な緊張感と躍動感を吹き込んでいる。

734

Hope of the World

1 Hope of the world, thou Christ of great com - pas - sion:
 2 Hope of the world, God's gift from high - est heav - en,
 3 Hope of the world, a - foot on dust - y high - ways,
 4 Hope of the world, who by thy cross didst save us
 5 Hope of the world, O Christ, o'er death vic - to - rious,

save us, thy peo - ple, from con - sum - ing pas - sion,
 still let thy Spir - it un - to us be giv - en
 walk thou be - side us lest the tempt - ing by - ways
 we ren - der back the love thy mer - cy gave us;
 we would be faith - ful to thy gos - pel glo - rious;

who by our own false hopes and aims are spent.
 to heal earth's wounds and end our bit - ter strife.
 lure us a - way from thee to end - less night.
 take thou our lives and use them as thou wilt.
 thou art our Lord! Thou dost for - ev - er reign!

各変奏は単なる装飾ではなく、主題の本質を深く探究する過程として機能し、時に瞑想的に、時に爆発的なエネルギーをもって展開される。とりわけ複雑なリズム構造、対位法的進行、そしてオルガンの色彩を最大限に生かした音響構成は、演奏者に高度な技巧と明確な構造把握を要求する。本作は、伝統的な変奏曲の枠組みの中で現代オルガン音楽の可能性を拡張した作品であり、ハキムの音楽的個性と現代オルガン音楽のダイナミズムを同時に示す重要なレパートリーである。



スタンフォードはアイルランド生まれの作曲家・指揮者・教育者であり19世紀末から20世紀初頭にかけて英国音楽ルネサンスを牽引した中心人物のひとりである。ケンブリッジ大学およびロンドン王立音楽大学で長年教授を務め、R. ヴォーン・ウィリアムズ、G. ホルスト、H. ハウエルズなど、英国近現代音楽を代表する作曲家を育てた。スタンフォードはドイツ古典・ロマン派の伝統、とりわけブラームスに見られる形式美と対位法的思考を基盤としつつ、英国教会音楽および合唱の伝統を芸術的に昇華させた作曲家として評価されている。彼の音楽は、明確な構造、均衡の取れた形式、節度あるロマン的表現を特徴とする。

本作は、彼が作曲した5曲のソナタのうち最後の作品であり、晩年に書かれている。スタンフォードのオルガン音楽が最も円熟した段階に達していることを示す作品である。副題“Quasi una Fantasia”が示すとおり、本ソナタは伝統的なソナタ形式を踏まえながらも、自由で幻想的な性格を備え、形式的厳格さと即興的な流れとが有機的に結びついている。賛美歌旋律“Engelberg”を素材とし、全3楽章から構成される本作は、第1楽章において温和で品位ある主題展開によって明るく安定した雰囲気を提示し、第2楽章では叙情的で内省的な性格が強調される。終楽章は活気あるリズムと明確な動機に基づいて力強く展開され、作品全体を荘重かつ前向きなエネルギーで締めくくる。全体として和声は保守的でありながら豊かで、対位法的処理や声部進行にスタンフォード特有の緻密な作曲技法が明確に示されている。

641 When in Our Music God Is Glorified

1 When in our mu-sic God is glo-ri-fied,
 2 How of-ten, mak-ing mu-sic, we have found
 3 So has the church, in lit-ur-gy and song,
 4 And did not Je-sus sing a psalm that night
 5 Let ev-ery in-stru-ment be tuned for praise!

it is as though the whole cre-a-tion cried:
 as wor-ship moved us to a more pro-found
 borne wit-ness to the truth in ev-ery tongue:
 Then let us sing, for whom he won the fight:
 And may God give us faith to sing al-ways:

and ad-o-ra-tion leaves no room for pride,
 a new di-men-sion in the world of sound,
 in faith and love, through cen-tu-ries of wrong,
 when ut-most e-vil strove a-gainst the light?
 Let all re-joice who have a voice to raise!

Al-le-lu-ia!
 Al-le-lu-ia!
 Al-le-lu-ia!
 Al-le-lu-ia!
 Al-le-lu-ia!

このソナタは、華麗な技巧よりも音楽的品格と構造的完成度を重視する作品であり、英国後期ロマン派オルガン音楽の精髓を体現するものとして評価されている。演奏者には深い音楽的理解と均衡の取れた音色感覚が求められ、英国のオルガン・レパートリーの中でも重要な位置を占める作品である。

金 智聲 キム・ジソン Jisung Kim

「五大陸・五人のオルガニスト」シリーズでアジア代表として演奏したキム・ジソンは、ヨーロッパ、南北アメリカ、中東、オーストラリア、アフリカ、アジアを含む世界 75 か国で 1,500 回以上の演奏を行っている。

5 歳の時に母からピアノを学び始め、13 歳でオルガンを始め、18 歳で初のオルガン・リサイタルを開催した。牧師である父の影響を受け、ソウル神学大学で教会音楽とオルガンを専攻した。大学 4 年時にドイツ・ケルン国立音楽大学オルガン科に合格し、カール・リヒターとマルセル・デュブレの弟子であるヴィクトル・ルーカス氏にオルガンを、ヴォルフガング・シュトックマイヤー氏とゴットハルト・ゲーバー氏に即興演奏・通奏低音・フーガを、ヘルマン・J・ブッシュ氏にオルガン構造学・文献学・教授法を、ユーゲン・グラウス氏にピアノ歌曲伴奏を学んだ。審査員全員一致の満点でディプロム課程を修了し、さらに最高演奏家課程（コンツェルト・エグザーメン）も韓国人として初めて満点で卒業した。

その卓越した演奏力が認められ、1994 年にケルン・フィルハーモニーでヨーロッパ・デビューを果たし、翌 1995 年にはドイツ・バッハ音楽財団の奨学金を授与された。その後フランスに渡り、ミシェル・シャピュイに古典音楽を、ジャン・ギューとナジ・ハキムに音楽分析・即興演奏・フランス音楽を学んだ。

29 歳という若さで 12 回のリサイタルを通してバッハのオルガン全作品（284 曲）を演奏。その後、2006 年にはモーツァルトのオルガン作品全集、2007 年にはブクステフーデのオルガン作品全集（92 曲）のツアー・コンサートを韓国 6 都市で開催した。2008 年にはソウル神学大学教会音楽研究所の招きで、わずか 2 週間の間に 6 回のリサイタルでオリヴィエ・メシアン の全作品を演奏した。2009 年にはソウル文化財団の支援を受け、ヘンデルの 16 曲のオルガン協奏曲を自らの指揮と独奏で演奏した。さらにクーラン、ブルース、リュベック、リスト、メンデルスゾーン、ブラームス、フランク、シューマン、ギルマン、デュボワ、サン＝サーンスなどのオルガン作品全集も演奏している。

また、オルガンとバレエ、映画、影絵、ヴァイオリン、舞踊とのコラボレーション、オルガン・デュオや「オルガン・プラス」など、独創的なアイデアを通して多くの聴衆をオルガン音楽の世界へ導き続けている。さらに、韓国作曲家の作品を含む多くの新作の初演を手がけ、新しい作品の紹介にも力を注いでいる。自身の作曲や編曲作品も多くの演奏家により取り上げられており、即興演奏家としても活躍している。

1997 年にソウルレコードからドイツでのリサイタル・ライブ録音アルバムを発表して以来、4 枚のソロ・アルバムを録音、イギリスの指揮者ポール・スパイサーとともにプリテンおよびドヴォルザークの合唱曲を含む約 20 枚の録音に参加している。

オルガン協奏曲のソリストとしては、ドイツのケルン・オーケストラ、日本のテレマン・オーケストラ、パナマ国立オーケストラ、さらに韓国国内では KBS 交響楽団、ソウル市響、富川市響、仁川市響、蔚山市響、コリアン・フィルハーモニー、コリアン・チェンバー、プライム・オーケストラなどと共演している。また、国立合唱団やソウル、富川、高陽、晋州、清州、原州、瑞山、釜山市立合唱団とも共演している。

ドイツ、ルクセンブルク、日本、ロシアなどの国際オルガンコンクールで審査員を務め、ドイツおよびオランダの国際オルガン・アカデミーの講師としても活動している。

現在、ソウル神学大学オルガン専攻教授および石南中央教会オルガニストを務めている。

礼拝やコンサートなどの情報は、公式 X (旧 Twitter) やホームページでお知らせしています。



ホームページ



今年度開催したチャペルコンサートの動画をチャペル公式 YouTube チャンネルで配信しています。2026 年 3 月末までの期間限定配信です。

